The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	非標準的な家庭背景を持つ生徒の承認に関する研究
Author(s)	志田, 未来
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76349
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　志田　未来　）	
論文題名	非標準的な家庭背景を持つ生徒の承認に関する研究

論文内容の要旨

2000年代初頭はこれまでの「平等な社会」という日本のイメージを大きく覆した転換点である。メディアが様々な格差や不平等を取り上げるようになり始め、研究も進められてきた。しかし、大半の研究が経済面の影響力を示すにとどまっているとも言える。家庭背景が厳しい生徒は学業達成が低くなりがちだと指摘されるが、そのプロセスで何が起こっているのか。この過程を詳細に描き、そこから支援策を検討するということが本研究を貫く問題意識である。

本研究で用いる分析概念は、フレイザーの承認の概念である。フレイザーは不正義を経済的なものと文化的なものがあることを指摘し、そしてその不正義を解消するために前者には再配分を後者には承認が必要であるということを主張した。本研究では、この承認概念を用いることによって、社会文化的側面の重要性について検討する。

先行研究に残された課題を整理すると①子どもたちの不利が経済的側面に収斂される傾向にある②子どもを主体的な存在として捉えられていない。また、学校や教師を扱った研究の多くが非標準家庭の生徒（以下「非標準家庭の生徒」）を排除するものとして描かれる傾向にあり、彼らの担う多様な役割の可能性について十分に言及されていない。

先行研究の整理を踏まえ、本研究の課題を標準的な家族の規範が子どもの社会生活にどのように関連しているのかを明らかにし、非標準的な家庭背景を持つ生徒に対する支援策を検討することと設定する。この課題を明らかにするために、具体的には以下のように分析課題を定めた。①家族構造に関連する規範は非標準家庭の生徒にどのような影響を及ぼし、非標準家庭の生徒はそれにどう対処しているのか（第二章）。②家族機能に関連する規範は非標準家庭の生徒にどのような影響を及ぼし、非標準家庭の生徒はそれにどう対処しているのか（第三章）。③非標準家庭の生徒たちは、どのような仲間集団を形成して学校で過ごしているのか（第四章）。④非標準家庭の生徒たちが在籍する学校の教職員たちはどのように対応しているのか（第五章・第六章）。

第二章では家庭構造に焦点を当て、ひとり親家庭という構造上の差異をめぐる承認を検討した。分析を通じて、親の認識とは違った子どもの視点があること、そして自身の家庭経験にアンビバレントな感情を持っていることが示された。また、ひとり親家庭としての生活を語る際、家族関係が脱閉鎖的であることも特徴的な点の一つであった。ただし、こうした脱閉鎖性は承認が鍵となってもたらされていた。

第三章では、家庭の持つ機能に着目し、機能不全家庭の生徒の事例から家族の機能をめぐる承認を検討した。家庭での基本的なケアや学校活動に対するサポートの欠如によって学校活動への十分な参加が難しく、誤承認の状態に置かれていた。だが、家庭での困難を周囲にカミングアウトすることによって、自己の姿を受け入れてもらおうと承認をめぐる闘争が行われ、承認が獲得された。しかし、承認を獲得し続けることは難しく、時間が経つにつれ家庭状況とは切り離されて、個人の能力やヤル気の欠如として捉えられ、再び誤承認の状態に置かれるようになっていた。

第四章では非標準家庭の生徒たちが形成するやんちゃ集団に焦点を当て、承認獲得手段の一つとして検討を行った。非標準家庭の生徒たちは、家庭的な背景から学年が上がるにつれ、やんちゃ集団を拠り所とするようになっていた。このやんちゃ集団を一つの緩衝剤のように活用しながら、参加できる活動を選んでクラスに戻っていく姿が観察され、やんちゃ集団が学校から完全に離脱してしまうことを避けるための機能を有していることが示された。

第五章では、教職員たちの実践を非標準家庭の生徒の承認を保障する働きかけに焦点を当てて描いた。教職員は生徒の学校での様子を家庭背景と地続きで捉え、教授関係に留まらない幅広い役割を担おうとしていた。しかし、教師たちは単なる「承認の与え手」であるだけでなく、カルチャーショックを経験することで、自己の依存状態を認識し、生徒や同僚教師に依存するかたちで仕事を行うという新たな教師観を身に着けていることがわかった。

第六章では、アメリカの学校の事例を分析することを通じて、日本の学校の非標準家庭の生徒の承認をいかに保障することができるのかについて、知見を得ることを試みた。事例より、教職員が一丸となって生徒・教師の依存

先を可能な限り増やすことで生徒たちの承認を保障していたことが明らかになった。
　終章では、各章から得られた知見を踏まえ先行研究の課題と照らし合わせながら理論的インプリケーションを提示した。その上で、非標準家庭の生徒を支えるための実践的な支援策の検討を行った。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　志田　未来　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	志水　宏吉
	副 査　教授	高田　一宏
	副 査　教授	牟田　和恵

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、きびしい家庭背景をもつ生徒たちの低い学業達成を生じさせている社会的過程を明らかにし、彼らの低学力状況を打開するための支援策を検討することにある。本論文の中心的な理論枠組みは、フレイザーの「承認」の概念である。フレイザーは不正義を経済的なものと文化的なものの2つに整理し、その不正義を解消するために前者には「再配分」が、後者には「承認」が必要であるということを主張した。本研究では、この枠組みに即して議論を展開する。なお、本研究の中心的な調査対象は関西地方に位置する、ある公立中学校であり、そこで申請者は数年間にわたる参与観察調査を行った。

この論文は、8章構成をとっている。

まず序章では、先行研究の整理を踏まえ、本研究の課題を標準的な家族の規範が子どもの社会生活にどのように関連しているのかを明らかにし、非標準的な家庭背景を持つ生徒に対する支援策を検討することが本論文の課題として設定される。この課題を明らかにするために、以下のように分析課題が定められた。①家族構造に関連する規範は非標準家庭の生徒にどのような影響を及ぼし、非標準家庭の生徒はそれにどう対処しているのか（第2章）。②家族機能に関連する規範は非標準家庭の生徒にどのような影響を及ぼし、非標準家庭の生徒はそれにどう対処しているのか（第3章）。③非標準家庭の生徒たちは、どのような仲間集団を形成して学校で過ごしているのか（第4章）。④非標準家庭の生徒たちが在籍する学校の教職員たちはどのように対応しているのか（第5章・第6章）。

第2章では家族構造に焦点を当て、ひとり親家庭という構造上の差異をめぐる承認が検討された。分析を通じて、親の認識とは違った子どもの視点があること、そして自身の家庭経験にはアンビバレントな感情が随伴することが示された。

第3章では、家庭の持つ機能に着目し、機能不全家庭の生徒の一事例から家族の機能をめぐる承認が検討された。家庭での基本的なケアや学校活動に対するサポートの欠如によって学校活動への十分な参加が難しく、誤承認の状態に置かれていた当該生徒は、家庭での困難を周囲にカミングアウトすることによって、いったんは周囲の承認を得ることができた。しかし、時間が経つにつれ個人の能力やヤル気の欠如として捉えられ、再び誤承認の状態に置かれるようになった。

第4章では、非標準家庭の生徒たちが形成するやんちゃ集団に焦点を当てた分析が展開された。非標準家庭の生徒たちは、家庭的な背景から学年が上がるにつれやんちゃ集団を拠り所とするようになっていった。この集団は緩衝材のような役割を果たし、そこに集う生徒たちが学校から完

全に離脱してしまうことを避けるための機能を有していることが示された。

第5章では、教職員たちの実践を、非標準家庭の生徒の承認を保障する働きかけに焦点を当てて描き出した。教職員たちは、生徒の学校での様子をきびしい家庭背景との関連で捉え、学習指導の関係にとどまらない幅広い役割を担おうとしていた。また第6章では、調査対象をアメリカのハイスクールに移し、前章までで展開されている日本のあり方との比較を試みた。そこでは、教職員が一丸となって生徒の依存先を可能なかぎり増やすことで生徒たちの承認を保障している様子が観察された。

終章では、各章から得られた知見を踏まえ先行研究の課題と照らし合わせながら理論的インプリケーションが提示され、その上で、非標準家庭の生徒を支えるための実践的・具体的な支援策の検討がなされた。

本論文が主題とする「きびしい家庭背景を有する生徒たちの低学力」というテーマは、１９９０年代以降に教育学・教育社会学のなかで活発に扱われるようになってきたものであるが、それを「承認」という視点から読み解くという本論文の着想はきわめてユニークなものである。長期の参与観察調査によって得られた豊富な質的データにもとづいて展開される論理も興味深く、導き出された数々の知見も斬新なものである。そうした意味において本論文は極めて良質のクオリティを有するものであり、本学問分野の新境地を切り拓くものとして高く評価しうる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。